





# 「婦人差別撤廃条約」に対する 社会帝国主義者の讚美

## (一)宮本一派の讚美論と婦人労働

桜井絹枝は「赤旗評論版」一七三号「国際水準から見た日本の働く婦人の状態」と題する論文で、「婦人差別撤廃条約と世界行動計画は、男女平等の確立は人格と能力の全面的な開花、社会の進歩と発展を保障するものであり、男女平等は、世界の平和と、社会および国際秩序の民主的変革と結合して達成されることを示唆している」として讚美している。どの様な社会経済制度の下で、どのような階級が婦人を支配し差別しているのかについて明らかにしない。婦人差別論は抽象的なものであり、代わりにアルジョア民主主義をもちこんで、婦人の真の自由は共産主義の実現と共にあるのだという革命的マルクス・レーニン主義に敵対している。

この条約は、その前文で、国連憲章、国際人権規約、世界人権宣言その他において、人権、人間尊重、男女同権、差別否認等々について述べたが、「にも関わらず、婦人に対する広範な差別が、いぜんとして存在している。要はアルジョアの男女平等思想が表明されているのだが、この条約と同じ発想をしているのが、宮本一派の婦人論イデオログの桜井絹枝である。つまり桜井は「なぜ法的平等が進むに本質的、実質的に平等にならないか。言いかえれば、アルジョア民主主義の達成がある程度進んだ段階で、実質的な手段が実現していない理由はなにか」(労働運動、七九年一月号、二八頁)というのである。

このような発想は、実に「純粋民主主義」であり、男女平等の理念が実体をつくりだして行くのだという観念にとらわれており、その観念に妨げられているとして、この表現を妨害しているが、資本、自民党政府なのだというわけである。

柴田の誤りは、第一に、地主と資本家、商人のいるところでは完全な法律上の男女平等、男女同権を与えていない、いつことをみていない、(例えば日本政府が署名をしなかった理由の一つである国籍法の父系血統優先主義もその一つである)第二に、地主資本家、商人のいるところ、必ず、婦人の社会的生産、社会生活からの圧迫、制限があり、社会の経済単位という個別家族の属性と結びついて婦人が家事労働に拘束されていることが、法的平等形式と結びついてい

ることを見ることができない。第三に、男女差別問題を労働問題の一部としての婦人問題に含まれるものとして正しくとらえていない。従って婦人の要求をアラレタリイ独裁と結びつけることができないのである。

今日日本の婦人労働状態はどうかという点から言えば、労働婦人は、一五才以上女子人口中、四五・八%(七六年現在)であり、かつそのうち雇用者は二〇三万人で約六〇%を占めており、また、女子労働人口は労働人口全体の三七・四%になっており、そのうち女子雇用者は全雇用者の約三分の一ともなっている。更に中高年、既婚の婦人労働者の増加、そして繊維、食品、精密機械等の労働集約型産業で婦人は補助労働ではなく基本的労働力として資本によって充用されている。こうした婦人労働の動向は、労働問題は労働婦人の問題を抜きにして語れず、婦人問題は男女アラレタリイの問題とならなければならぬことを示している。

更に近年、資本は、婦人労働者の本採用を相対的に減らし、婦人パートタイマーの採用を増やし、かつ都市部においては婦人労働力比率が(一〇才)一四才と四五才一五〇才(二二才)に比べて五割以上という形で労働力を用い、婦人労働の戦力化を計っている。そして、このような婦人労働事情に対応して雇用条件、労働条件等に対する婦人差別がなされ、例えば、婦人の平均賃金は男子の賃金に定率近まで上昇していくのに対して、二四・五歳でピークになる婦人は生きる必要からその二重の役割の衝突を我慢して働かなければならない。中間層の婦人は経

済的には家庭にとまるともできるし、どちらでも選択できる可能性をもっているといわれている。そして報告は婦人の家事労働等次の「全世界で婦人の経済的無償労働は莫大であるが、すべての人間労働を対等に評価する立場」から、「婦人の無償労働」について、国連事務総長報告(本年二月二五日)、「三月五日の国連婦人の地位委員に提出された」の「婦人の就業と得られた前進」その概観と評価(「世界政治資料」No.五七〇)、「一」所収を検討し、次のような結論を下している。

「婦人の無償労働を市場経済の拡大による商品原理で解決しようとする(例えば主婦賃金等)努力は科学的でない。……それは国民経済の反独占民主的計画化のなかに位置づけられるべきである。……国連報告は「ほとんどの場合、婦人が家事労働の大部分を処理している」とは、家庭の彼女達の役割や仕事によって大きく影響される(同二五頁)として、この報告の分析に対し、渡辺は「婦人の無償労働」の解決を「国民経済の反独占民主的計画化の中に位置づけるべき」と言うのである。しかし報告は「無償労働」と言い、渡辺は「無償労働」と言っていることその事実について、渡辺は何ら理論的に説明しない。なぜ「無償労働」「無償労働」になっているかといえ、婦人の

## (二)連派の「無償労働」解決論

この婦人労働事情は婦人問題と男女差別問題とする日本共産党宮本一派の婦人論を打ち破り、婦人労働運動を共産主義運動と結びつけることをますます要求しているのである。

この婦人労働事情は婦人問題と男女差別問題とする日本共産党宮本一派の婦人論を打ち破り、婦人労働運動を共産主義運動と結びつけることをますます要求しているのである。

この婦人労働事情は婦人問題と男女差別問題とする日本共産党宮本一派の婦人論を打ち破り、婦人労働運動を共産主義運動と結びつけることをますます要求しているのである。

この婦人労働事情は婦人問題と男女差別問題とする日本共産党宮本一派の婦人論を打ち破り、婦人労働運動を共産主義運動と結びつけることをますます要求しているのである。

この婦人労働事情は婦人問題と男女差別問題とする日本共産党宮本一派の婦人論を打ち破り、婦人労働運動を共産主義運動と結びつけることをますます要求しているのである。

この婦人労働事情は婦人問題と男女差別問題とする日本共産党宮本一派の婦人論を打ち破り、婦人労働運動を共産主義運動と結びつけることをますます要求しているのである。

この婦人労働事情は婦人問題と男女差別問題とする日本共産党宮本一派の婦人論を打ち破り、婦人労働運動を共産主義運動と結びつけることをますます要求しているのである。

## (三)「国際秩序の民主的変革」論の敵対性

桜井は、男女平等は「世界の平和と社会及び国際秩序の民主的変革と結合して達成される」としている。この「国際秩序の民主的変革」とは、第二世界の要求を反映したものであり、第三世界の要求を反映したものである。第三世界の要求は、第一に、地主と資本家、商人のいるところでは完全な法律上の男女平等、男女同権を与えていない、いつことをみていない、(例えば日本政府が署名をしなかった理由の一つである国籍法の父系血統優先主義もその一つである)第二に、地主資本家、商人のいるところ、必ず、婦人の社会的生産、社会生活からの圧迫、制限があり、社会の経済単位という個別家族の属性と結びついて婦人が家事労働に拘束されていることが、法的平等形式と結びついてい

ることを見ることができない。第三に、男女差別問題を労働問題の一部としての婦人問題に含まれるものとして正しくとらえていない。従って婦人の要求をアラレタリイ独裁と結びつけることができないのである。

今日日本の婦人労働状態はどうかという点から言えば、労働婦人は、一五才以上女子人口中、四五・八%(七六年現在)であり、かつそのうち雇用者は二〇三万人で約六〇%を占めており、また、女子労働人口は労働人口全体の三七・四%になっており、そのうち女子雇用者は全雇用者の約三分の一ともなっている。更に中高年、既婚の婦人労働者の増加、そして繊維、食品、精密機械等の労働集約型産業で婦人は補助労働ではなく基本的労働力として資本によって充用されている。こうした婦人労働の動向は、労働問題は労働婦人の問題を抜きにして語れず、婦人問題は男女アラレタリイの問題とならなければならぬことを示している。

更に近年、資本は、婦人労働者の本採用を相対的に減らし、婦人パートタイマーの採用を増やし、かつ都市部においては婦人労働力比率が(一〇才)一四才と四五才一五〇才(二二才)に比べて五割以上という形で労働力を用い、婦人労働の戦力化を計っている。そして、このような婦人労働事情に対応して雇用条件、労働条件等に対する婦人差別がなされ、例えば、婦人の平均賃金は男子の賃金に定率近まで上昇していくのに対して、二四・五歳でピークになる婦人は生きる必要からその二重の役割の衝突を我慢して働かなければならない。中間層の婦人は経

済的には家庭にとまるともできるし、どちらでも選択できる可能性をもっているといわれている。そして報告は婦人の家事労働等次の「全世界で婦人の経済的無償労働は莫大であるが、すべての人間労働を対等に評価する立場」から、「婦人の無償労働」について、国連事務総長報告(本年二月二五日)、「三月五日の国連婦人の地位委員に提出された」の「婦人の就業と得られた前進」その概観と評価(「世界政治資料」No.五七〇)、「一」所収を検討し、次のような結論を下している。

「婦人の無償労働を市場経済の拡大による商品原理で解決しようとする(例えば主婦賃金等)努力は科学的でない。……それは国民経済の反独占民主的計画化のなかに位置づけられるべきである。……国連報告は「ほとんどの場合、婦人が家事労働の大部分を処理している」とは、家庭の彼女達の役割や仕事によって大きく影響される(同二五頁)として、この報告の分析に対し、渡辺は「婦人の無償労働」の解決を「国民経済の反独占民主的計画化の中に位置づけるべき」と言うのである。しかし報告は「無償労働」と言い、渡辺は「無償労働」と言っていることその事実について、渡辺は何ら理論的に説明しない。なぜ「無償労働」「無償労働」になっているかといえ、婦人の

「戦線」をつくらせて「政治的変革」をやり、「日ソ平和条約の締結とアジア集団安保体制」を実現し、日米安保を廃棄し、「銀行・大企業・基幹産業の国有化と民主化規程」によって国民生活の安定と経済建設を実現し、「反帝・反独占統一戦線」で「先進的民主主義制度」を樹立しようとするものであり、「発展途上国の独立運動」「社会主義共同体制」と結びつこうという路線である。

このような連派路線は、世界プロ独・共産主義革命をめざす国際階級闘争に敵対する路線である。ここでは、日本共産党宮本一派の社会帝国主義の路線と何ら異なるものがないのである。先進的婦人労働者は「日本のこえ」派の路線に組み込まれた渡辺の「国際秩序の反独占民主的計画化」による「婦人の無償労働」の解決と「共・社の革新政策」に望みをかけて「反独占・反帝国主義の統一

しかもそのさい外国資本が重要な役割を演じている多くのラテンアメリカ諸国では、資本集約型の技術が用いられた結果、男女を問わず、近代的部門への労働の組み入れが制限されてきた。それでも労働力が作り出されているときにはそれは男子に与えられている(同二)「資本集約型工業と「商業化された農業」との「機械化」によって男子の失業者や不完全就業者が増大したことは、婦人の競争力を弱め、婦人を劣悪な地位におくことになっている。更にまた、「大多数の発展途上国では、一般に雇用の増大があまりに緩慢であったため、急速に増大していく労働力を吸収するにはいたらなかった……新規の都市労働者は引き続き第三次産業や製造部門の周縁のモグリの労働部門に働かざるを得ない(同四八頁)が、サービス部門は完全な就業機会を得るために不完全就業者が待機するブルになっており、この部門には大きなかつ高まる比重で婦人が含まれている。こうしたサービス部門は低賃金であり、地位の低いものである。なぜかのように、たの報告ではふれていないが、アジア、ラテンアメリカその他では、旧植民地主義の遺産であるモノカルチャー経済の推進のために、新規に農民の土地を収奪し、しかしながら大中の土地所有者が機械化農業へ移行したため、農民を農業労働者として吸収できず、更にアメリカ等の余剰農産物の輸出にアメリカの輸出は、農民の所得を低下させ、多くの労働者を都市へ追い出すことになったということがある。更にまた、(七月一日誌)と演説したような「救済思想」すなわち途上国は貧しい、このような貧しい国には援助して開発してやれば貧しい国は変わるだろうという新植民地主義のイデオロギーと闘い、民族解放運動と結びついたアラレタリイ国際主義にもとづく国際階級闘争を闘うことが要請されているのである。渡辺のように国際主義の範囲でなんとかしようと、この発想は、国際共産主義婦人労働運動とあいまいなものである。

# スターリンの帝国主義認識の批判

## ＝レーニン帝国主義論の学習のために＝

### はじめに

スターリンは帝国主義について研究した論文を残していない。だが彼が『レーニン主義の基礎』で与えたレーニン帝国主義論の解釈は、いわゆる「三つの矛盾論」として、今日でも連共産党のみならず日共党内派の間でもレーニン主義の正統な継承であるとみなされている。

例えは林直道は『原典解説帝国主義論』（青木書店）の三二二頁でレーニンの革命理論を説明するに当たってスターリンの「三つの矛盾論」を引用してこのように述べている。『レーニン主義の基礎』で与えられたレーニン帝国主義論の解釈は、いわゆる「三つの矛盾論」として、今日でも連共産党のみならず日共党内派の間でもレーニン主義の正統な継承であるとみなされている。

### A、スターリンのレーニン解釈の批判

#### (一)「三つの矛盾」論

スターリンは『レーニン主義の基礎』で「レーニン主義は、帝国主義とプロレタリア革命の時代のマルクス主義である」（国民文庫版九頁）と述べた上で、レーニン主義の解説を行なっている。この本から、スターリンがレーニンの帝国主義論とプロレタリア革命の理論に関して説明している部分をとりだして検討しよう。

レーニンの帝国主義論に関するスターリンの解説は、一、レーニン主義の歴史の根源、二、レーニン主義の「三つの矛盾」論、三、理論、で述べられている。「三つの基本的な命題」として記述されている。まず前者を検討しよう。

「レーニンは、帝国主義を『死にかけている資本主義』と呼んだ。なぜか？ ならば、帝国主義は、資本主義の矛盾を限界まで、すなわち、それをこれ以上革命が始まる極限まで、もつてゆくからである。これらの矛盾のうち、最も重要なものを見なければならぬ。それは、次の三つの矛盾である。」（同二〇一頁）

スターリンは「三つの矛盾」を列記するにあたってこう述べている。だが、このように説明はレーニンの理論を解説したことにはなっていない。

レーニンが帝国主義を「死滅しつつある資本主義」と呼んだのは次の三点にもとづいていた。

業は依然として必要である。ところでスターリンの帝国主義認識は全く無内容であるから、これを批判することにもつて何か積極的なものを獲得するといったことは期待できない。したがってわれわれはスターリンの認識に『帝国主義論の学習』（新日本新書）の二三四頁で同様のことをしている。

こうしてこの「三つの矛盾」論に象徴されるスターリンの帝国主義認識がレーニン主義とは無縁のしるものであることを暴露する作

「第一の矛盾は、労働と資本の矛盾である。帝国主義は、工業諸国における独占的寡頭資本とシジケートの、銀行と金融寡頭制の完全な結合である。この完全な結合では、労働者階級の普通の方政党と議院闘争は、まったく不十分なことがわかった。資本の力にまかされて、これまでおこりつづけてきた生活は、ますます落ちぶれてゆくか、それとも新しい武器をとりか、帝国主義は、プロレタリアートの幾百万の大衆のまに、問題をこぼし提起する。帝国主義は、労働者階級を革命に近づける。

第二の矛盾は、原料資源地や他国の領土を獲得するためにたかたか種々の金融グループや帝国主義列強のあいだの矛盾である。帝国主義は、原料資源地への資本の輸出であり、これらの原料資源地の独占的領有のための急速した世界を再分割するための闘争であり、……それが帝国主義戦争を……避けられぬ要素としてそのなかに入っている。……この事情は、それはまたそれで、帝国主義者がたがいに弱め、資本主義全体の地歩を弱め、プロレタリア革命の時を近づけ、この革命を実践的に必然にする点で、注目し得る。

第三の矛盾は、ひとにぎりの支配的な「文明」民族と、世界の植

民地・従属国の何億という人民との矛盾である。……この事情がプロレタリアートにとって重要なものとして、資本主義からプロレタリア革命の準備軍に転化させることにより、資本主義の地歩を根底から掘りくずす点にある。」（同二〇一頁）

以上から明らかのように、スターリンの「三つの矛盾」論の特徴は、それが政治と経済をひくくした社会現象における諸勢力の対立と闘争を意味しているという点である。スターリンは「資本主義の矛盾」というように問題を提起しおきながら、資本主義の経済的運動の原因となっている内的矛盾を念頭に置いているのであ

「第一の命題。先進資本主義国で金融資本が支配し、金融資本のきわめて重要な業務として有価証券が発行され、帝国主義の基礎の一つとして原料資源地へ資本が輸出され、金融資本の支配の結果として金融寡頭制が完全であることとである。」（同三三四頁）

説明しておらず、従ってまた社会現象における対立と闘争を正しく評価することでもできていない。このことは「第一の矛盾」を検討すれば直ちに明らかとなる。スターリンにあっては、資本の生産過程の運動を促進する内的矛盾と捉えられておらず、そこでは金融寡頭制の完全な労働者階級との闘争という社会現象に則して述べられているからである。

そういうわけで「資本主義の矛盾」の激化というものは、労働者階級を革命に近づけることというように想定されることになる。

ここにはブルジョアの労働運動による労働者階級の分裂や、それとの党派闘争の問題が全然提起されていないが、それは矛盾の捉え方を誤っているからである。

「第二の矛盾」でスターリンは帝国主義戦争の不可避性について説明しているが、これも成功してはいない。帝国主義の不可避性を論証するために帝国主義列強の対立をあげただけでは全く不十分であり、帝国主義列強の対立が生みだされる原因そのものが明らかにされなければならない。そのためには帝国主義の本質が解明されなければならないが、これは全く考慮されていない。

例えば金融資本の成立にともなう資本輸出の必然性やそれによって資本家団体及び列強による世界の再分割の不可避性が最低限述べられ、金融寡頭制による独占が資本主義一般の矛盾を解決しておらず、不均等発展と競争を排除するものではないことが明らかにされ

ねばならない。

なるほどスターリンも金融寡頭制や資本輸出や植民地の独占等に ついて述べているが、それらはいずれも現象をラベツしたものにすぎない。

このようになってしまったのは、資本家団体や列強の間の対立関係を「矛盾」として捉えておらず、それとこの関係が矛盾であるという想定から帝国主義戦争の不可避性をひきだしているからである。だからスターリンにあっては資本家団体や列強の間の対立関係の本当の内 容を捉えることができていない。

「第三の矛盾」も社会現象に則したものであって、帝国主義に対する植民地・従属国の人民の革命運動の激化がどのような経済的条件にもとづいているかという点では考慮されていない。

また「植民地・従属国をプロレタリア革命の準備軍に転化」させたいという矛盾の概念から導かれては明らかにならない無力なものとされた（同二〇〇頁）と述べているが、このように第一の矛盾の誤りを古く闘争方法への固執というようにしか捉えていない。これは日和見主義や社会排外主義との党派闘争を正しく組織することはできない。

「第一の命題。……資本主義が植民地の抑圧の全世界的体制に転化した。……ひとにぎりの先進資本主義諸国と、帝国主義的抑圧から解放のためにたたかざるをえない。」

「第一の命題。先進資本主義国で金融資本が支配し、金融資本のきわめて重要な業務として有価証券が発行され、帝国主義の基礎の一つとして原料資源地へ資本が輸出され、金融資本の支配の結果として金融寡頭制が完全であることとである。」（同三三四頁）

労働運動の形成によるプロレタリアートの分裂という問題が視野に入っていない。このことは金融寡頭制と労働者階級の対立を「労働と資本の矛盾」として把握したことの必然的な帰結であった。スターリンにあっては、帝国主義は「資本主義を激化させるわけだから、労働者階級はもっぱら単線的に革命に向かうものとして描かれることになってしまっている。だからスターリンも、二方法、のところで、第二インターの諸党との闘争について述べてはいない。しかしここでは帝国主義が労働運動における日和見主義の一次的勝利のための経済的基礎を生みだしているというレーニンの視角は全然導入されていない。

「第三の命題。……世界再分割のための急速した闘争をもち、資本主義諸国の不均等な発展、破壊された「均衡」を回復させる唯一の手段である帝国主義戦争。……こうしたことは、第三の命題によっても証明されている。

階級闘争における諸階級・諸政治勢力の対立を具体的分析にもとづいて明らかにし、とりわけ日和見主義・社会排外主義との闘争を強調するというレーニンの方法は投げ捨てられ、階級闘争はスターリン式「三つの矛盾」の激化の過程として、主観的に構成されているのである。

ない大多数の植民地従属国と、分裂させた。

ここから、第二の結論がでてくる。すなわち、植民地諸国に革命の危機が激化する点、国外の植民地戦線が帝国主義にたいする憤りの諸要素が増大することである。（同三四頁）

これは「第三の矛盾」の上にならなければならない。ここでは帝国主義と植民地・従属国との関係を矛盾と捉えてしまっている。従属国の中間的諸形態が忘れ去られ、植民地・従属国の反帝国主義に直面して帝国主義諸国が妥協し、植民地・従属国を資本主義化してゆくことによってこれを骨抜きにしてゆく余地があることが押えられていない。

「第三の命題。……世界再分割のための急速した闘争をもち、資本主義諸国の不均等な発展、破壊された「均衡」を回復させる唯一の手段である帝国主義戦争。……こうしたことは、第三の命題によっても証明されている。

階級闘争における諸階級・諸政治勢力の対立を具体的分析にもとづいて明らかにし、とりわけ日和見主義・社会排外主義との闘争を強調するというレーニンの方法は投げ捨てられ、階級闘争はスターリン式「三つの矛盾」の激化の過程として、主観的に構成されているのである。

「第一の命題。先進資本主義国で金融資本が支配し、金融資本のきわめて重要な業務として有価証券が発行され、帝国主義の基礎の一つとして原料資源地へ資本が輸出され、金融資本の支配の結果として金融寡頭制が完全であることとである。」（同三三四頁）

の植民地革命とが、帝国主義的世界的な戦線に反対する革命的な世界的な統一戦線（不可避的に連合することである。）（同三四一頁）

これは「第一の矛盾」の上にならなければならない。ここでは帝国主義と植民地・従属国との関係を矛盾と捉えてしまっている。従属国の中間的諸形態が忘れ去られ、植民地・従属国の反帝国主義に直面して帝国主義諸国が妥協し、植民地・従属国を資本主義化してゆくことによってこれを骨抜きにしてゆく余地があることが押えられていない。

「第三の命題。……世界再分割のための急速した闘争をもち、資本主義諸国の不均等な発展、破壊された「均衡」を回復させる唯一の手段である帝国主義戦争。……こうしたことは、第三の命題によっても証明されている。

階級闘争における諸階級・諸政治勢力の対立を具体的分析にもとづいて明らかにし、とりわけ日和見主義・社会排外主義との闘争を強調するというレーニンの方法は投げ捨てられ、階級闘争はスターリン式「三つの矛盾」の激化の過程として、主観的に構成されているのである。

「第一の命題。先進資本主義国で金融資本が支配し、金融資本のきわめて重要な業務として有価証券が発行され、帝国主義の基礎の一つとして原料資源地へ資本が輸出され、金融資本の支配の結果として金融寡頭制が完全であることとである。」（同三三四頁）

「第一の命題。先進資本主義国で金融資本が支配し、金融資本のきわめて重要な業務として有価証券が発行され、帝国主義の基礎の一つとして原料資源地へ資本が輸出され、金融資本の支配の結果として金融寡頭制が完全であることとである。」（同三三四頁）

#### (二)「三つの基本的な命題」論

スターリンは「三つの矛盾」のところで述べているプロレタリア革命の理論におけるレーニンの「三つの基本的な命題」とは先の「三つの矛盾」の上にならされたものであった。

「第一の命題。先進資本主義国で金融資本が支配し、金融資本のきわめて重要な業務として有価証券が発行され、帝国主義の基礎の一つとして原料資源地へ資本が輸出され、金融資本の支配の結果として金融寡頭制が完全であることとである。」（同三三四頁）

「第一の命題。先進資本主義国で金融資本が支配し、金融資本のきわめて重要な業務として有価証券が発行され、帝国主義の基礎の一つとして原料資源地へ資本が輸出され、金融資本の支配の結果として金融寡頭制が完全であることとである。」（同三三四頁）

#### (三)「一国社会主義論と全般的危機論

述べている社会主義の勝利が「一国」でも可能であるという部分を引き、レーニン主義の継承として見せかけてきた。これはこじつけにすぎなかった。

ではスターリンは以前は国際主義者であったのだろうか。そうではなかったことを立証しているのが彼の次の叙述である。

「以前には、ある発展した国のプロレタリア革命を論じるべきには、その対立物である個々の国の資本の戦線に對する個々の自足的なものとしてこれを論じるのが常であった。だがいまでは、この見地はもはや不十分である。い

述べている社会主義の勝利が「一国」でも可能であるという部分を引き、レーニン主義の継承として見せかけてきた。これはこじつけにすぎなかった。

ではスターリンは以前は国際主義者であったのだろうか。そうではなかったことを立証しているのが彼の次の叙述である。

「以前には、ある発展した国のプロレタリア革命を論じるべきには、その対立物である個々の国の資本の戦線に對する個々の自足的なものとしてこれを論じるのが常であった。だがいまでは、この見地はもはや不十分である。い



ろで、力は経済的および政治的発展に応じて変化する。いま起こっていることを理解するために、この問題を力の変化によって解決されようとしているかを知らなければならぬ。一九七七年

「これはスターリンが述べているような『種々の金融グループの間の矛盾』といった見地は見られない。レーニンは資本家団体の間の関係を矛盾と捉えておらず、資本家団体のあいだの闘争が何れも重要なのである。」

### ⑦ 列強のあいだでの世界の分割

「最新の資本主義の時代はわれわれに過ぎないことをしめしている。すなわち、資本家団体のあいだに世界の経済的分割を基礎として一定の関係が形成されつつあり、そしてこれとやらんで、これと関連して政治的団体のあいだに、諸国家のあいだに、世界の領土的分割を基礎として、植民地のための闘争、経済的領土のための闘争を基礎として、一定の関係が形成されつつあることをいふのである。」(同九八頁)

「このように述べた上でレーニンは六章に入っている。このように述べた上でレーニンは六章に入っている。このように述べた上でレーニンは六章に入っている。このように述べた上でレーニンは六章に入っている。」

### ② 資本主義の寄生性と腐朽

「帝国主義論」第八章では「帝国主義の非常に重要な一側面」がとらえられている。それは帝国主義に固有の寄生性のことであるが、これについてレーニンは次のように述べている。

「さきに見たように、帝国主義の最も奥深い経済的基礎は独占である。これは資本主義の独占であり、すなわち、資本主義から成長してきて、資本主義、商品生産と原料資源の追求が激化すれば、それは独占の段階に達する。独占の段階に達すると、また全世界における競争の不足が強く感じられれば感じられるほど、また全世界における競争と原料資源の追求が激化すれば、それは独占の段階に達する。独占の段階に達すると、また全世界における競争の不足が強く感じられれば感じられるほど、また全世界における競争と原料資源の追求が激化すれば、それは独占の段階に達する。」

### ③ カウツキー批判

「原因は、①この国による全世界の搾取、②世界市場におけるこの国の独占的地位、③その植民地とプロレタリアートの一部のプロレタリアートを搾取することである。」

「この独占の運動はまた『国家的従属のいくたの過渡的形態』をつくりだす。レーニンはアルゼンチンとポルトガルの例をあげて、これらの形態についての説明をしている。」

### ① 帝国主義の包括的規定

「第一に、生産手段の私的所有のもとでのあらゆる独占の特徴である腐敗の傾向に現われている。第二に、資本主義の腐敗は、金利生活者……の膨大な層がつくりだされているに現われている。……第三に、資本輸出は自乗された寄生性である。第四に、金融資本は支配を志向するものであり、力を経済的および政治的発展に応じて変化させる。いま起こっていることを理解するために、この問題を力の変化によって解決されようとしているかを知らなければならぬ。一九七七年」

「このように述べた上でレーニンは六章に入っている。このように述べた上でレーニンは六章に入っている。このように述べた上でレーニンは六章に入っている。このように述べた上でレーニンは六章に入っている。」

「このように述べた上でレーニンは六章に入っている。このように述べた上でレーニンは六章に入っている。このように述べた上でレーニンは六章に入っている。このように述べた上でレーニンは六章に入っている。」

「このように述べた上でレーニンは六章に入っている。このように述べた上でレーニンは六章に入っている。このように述べた上でレーニンは六章に入っている。このように述べた上でレーニンは六章に入っている。」

「このように述べた上でレーニンは六章に入っている。このように述べた上でレーニンは六章に入っている。このように述べた上でレーニンは六章に入っている。このように述べた上でレーニンは六章に入っている。」

「このように述べた上でレーニンは六章に入っている。このように述べた上でレーニンは六章に入っている。このように述べた上でレーニンは六章に入っている。このように述べた上でレーニンは六章に入っている。」

「このように述べた上でレーニンは六章に入っている。このように述べた上でレーニンは六章に入っている。このように述べた上でレーニンは六章に入っている。このように述べた上でレーニンは六章に入っている。」

「このように述べた上でレーニンは六章に入っている。このように述べた上でレーニンは六章に入っている。このように述べた上でレーニンは六章に入っている。このように述べた上でレーニンは六章に入っている。」

「このように述べた上でレーニンは六章に入っている。このように述べた上でレーニンは六章に入っている。このように述べた上でレーニンは六章に入っている。このように述べた上でレーニンは六章に入っている。」

「このように述べた上でレーニンは六章に入っている。このように述べた上でレーニンは六章に入っている。このように述べた上でレーニンは六章に入っている。このように述べた上でレーニンは六章に入っている。」

「このように述べた上でレーニンは六章に入っている。このように述べた上でレーニンは六章に入っている。このように述べた上でレーニンは六章に入っている。このように述べた上でレーニンは六章に入っている。」

「このように述べた上でレーニンは六章に入っている。このように述べた上でレーニンは六章に入っている。このように述べた上でレーニンは六章に入っている。このように述べた上でレーニンは六章に入っている。」

「このように述べた上でレーニンは六章に入っている。このように述べた上でレーニンは六章に入っている。このように述べた上でレーニンは六章に入っている。このように述べた上でレーニンは六章に入っている。」



